

講演要旨

1. トピック「京でも見えたオーロラー明和 7 年の巨大磁気嵐」ー2018 年 1 月、文理融合シンポジウムの成果紹介ー 国立極地研究所名誉教授、AACK 山岸 久雄

東日本大震災の後、古典籍に記録された貞観の大津波のことが広く知られるようになった。このような、古典籍の中の自然災害、天変地異の記録を地球科学の視点で再検討し、そこから貴重な情報を抽出しようという試みが最近、文系、理系研究者の共同研究として進められている（「天変地異と人間社会の変遷：言葉の在り方と世界の在り方」（総研大 学融合推進センター長裁量支援研究）。その成果が「古典籍文理融合シンポジウム」（2018 年 1 月、立川）で発表された。本日はその成果の一つ、「日本で見られるオーロラと巨大磁気嵐」（片岡、岩橋）について紹介する。

2. 「ヒマラヤ氷河研究最前線」ー2009 年のヒマラヤ氷河スキャンダルとその後の展開ー 名古屋大学 大学院環境学研究科教授、笹ヶ峰会 藤田 耕史

2009 年に Science 誌の指摘で明らかになった、IPCC 第四次報告書におけるヒマラヤの氷河に関する誤った記述は、「ヒマラヤ氷河スキャンダル」もしくは「グレーシャーゲート」などと呼ばれ、その後、他の分野においても信頼性に乏しい記述が次々と明らかになったこともあり、IPCC 全体の信頼性を揺るがす一大スキャンダルとなった。その一方で、世界の氷河研究コミュニティがヒマラヤを含むアジア高山域の氷河に目を向けるきっかけにもなり、ここ数年の短期間に数多くの研究成果が発表された。ここでは、このヒマラヤ氷河スキャンダルの経緯と原因、IPCC の対応を振り返ると共に、このスキャンダル以降に発表された論文を概観し、アジア高山域における氷河研究の現状と今後の展望を述べる。

3. 「尾瀬と共に 54 年」ー札幌、京都を結んでー

尾瀬沼畔 長蔵小屋三代目 平野 紀子

次の点を中心に、お話します。

- ① 明治 23 年（1890 年）開山より戦前（1945 年）までの尾瀬に入山した、人々の顔ぶれ
- ② 戦後 直ぐに始まったダム工事、環境問題、平野家三代との関わりと今日の問題
- ③ 小屋で働いた若者たちのその後の人生。数々のお客様に支えられた、山小屋という特殊性が作り上げたドラマ
- ④ これからの世代がどう運営し継続し発展させていくのか、将来の展望

4. 「通える夢は崑崙の 高嶺の彼方ゴビの原」ー李陵説話と西域慕情ー

龍谷大学教授、京都大学名誉教授（中国法制史） 富 谷 至

前回は BC100 年ごろ、漢の武将李陵にまつわる悲劇をお話ししました。匈奴に降り、匈奴に寝返った李陵に対して、「隴西の士大夫、李氏を以て 愧 とす」とまで言われた李陵ではありませんが、その後時代が下るにしたがって、李陵悲話となって、逆臣から悲劇の英雄に評価が変わっていきます。それはいつ頃なのか、またその背景は。そして、六世紀の唐王朝を創始した李氏（李淵）は隴西出身であり、そこから李陵の子孫だとの伝説が生まれます。

伝説の形成だけではありません。伝説の舞台も、現実の土地とは異なり、物語、詩文の世界へとなくなりました。西域、シルクロード、莫北に対する抒情的世界です。

いくつかの西域の叙情詩、そこに詠われた世界は、現実のそれではなく、西域慕情ともいえる想像が作り上げたロマンの世界でした。しかしその想像の世界の強さは、逆に歴史の解釈にも影響を及ぼし、歴史家の目を曇らせるほどの力を今日まで保っているのです。